## SPECIAL MESSAGE

# 神戸百店会だより

## NEW TASTE

**★アサヒ生ビールZ**

「思いっきり爽快な生ビール」としてクオリティアップした新しいZ。仕事も遊びもスポーツもアクティブに楽しむ、20〜30代前半のヤング世代がいつでも気軽にリフレッシュできるスッキリとクリアな味。パッケージも斬新かつカジュアル、CMには人気の新世代アーティスト森高千里が登場。味もラベルもさらりと一新、うまさがノドにすべりこむビールです。

## BEAUTY

**★美容室エリザベス**

髪のトラブルの多くは、アルカリ性のシャンプーやパーマ液が原因です。ベル・ジュバンスは人の体と同じ弱酸性のトリートメントローション。髪と地肌の本来の健康と美しさを保つ、ヘアケアとスキンケアのトータルな美容法です。卒業、入学、就職の春はまた髪の痛みやすい季節です。ベル・ジュバンスでヘルシーな美しさを実感してください。

要予約☎331−8894

毎月曜、第三月・火休

イメージレディー市毛良枝

## NEWS

**★神戸いすゞ自動車**

'94第16回パリ〜ダカール〜パリ・ラリーで、いすゞ自動車のビッグホーンが13000kmを完全走破、みごと2年連続マラソンクラスで優勝しました。チーム青柳がビッグホーンイルムシャーRSで参戦した市販車無改造マラソンクラスとは、スタート前にサスペンション、デフ、エンジンヘッド等、主要部品に封印してゴールまで無交換で走り抜くクラス。街で走っているのと同じ車体での勝利は、ドライビングの優秀性、信頼性、耐久性を実証するもの。この性能を体感して頂くため、ぜひ、もよりの営業所でご試乗ください。

## SPRING FAIR

**★春のご会食にどうぞ**

開業13周年を迎えたポートピアホテルでは、感謝の気持ちを込めて、レストラン・バー全店でスプリングフェアを開催中（〜4月10日まで）。プレンデトワールで「洋食ランチバイキング」¥2500、京和田の「お好みおでん」¥3000、聚景園の「ヘルシーメニュー」¥6000などのスペシャル・メニューをご用意しています。

レヴァンテ「シャンパンランチ」

やわらぎ「花見遊膳」

## PEOPLE ＜121＞

**●人があっての洋服です**

**藤井節子さん〈ブティック装苑 大丸前店店長〉**

文化服装学院デザイン科の出身。1年後輩には、コシノジュンコや高田賢三がいる。オーダーから出発したお店だけに、既製服でもお客さんに合わせて、チョコチョコと手直ししてしまう。

"Simple is the Best" の信条からお勧めなブランドは、イタリアのマックスマーラーやポイクリッツァ。お値段も手頃で、流行の自然素材の春服も揃う。

## NEWS

**★こだわりの味をさらに追求**

おいしいサンドウィッチで定評のあったドンク サンドウィッチパーラー（トアロード）が2月26日、リフレッシュオープンした。今までのサンドウィッチのメニューに加え、フランスパンには絶対の自信を持つドンクが、そのパンを使って新たなメニューを生み出した。香ばしいパンと組み合わさった料理の味は絶妙。一度お試しを。

スタッフが爽やかな笑顔で出迎えてくれます

## TOPICS

**●ホテルゴーフルリッツよりおしらせ**

五木ひろし

**★開業5周年特別企画**

五木ひろし
ディナー&コンサート

日時　6月22日（水）
　1部　お食事　5時～
　　コンサート　7時～
　2部　お食事　7時15分～
　　コンサート　9時15分
料金　¥4,500
　懐石料理（税・サ込み）
☎321－5555

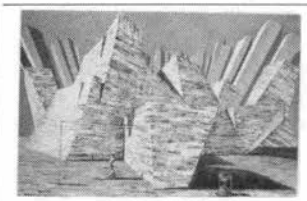
**★伊丹三樹彦と加藤さとるの音俳コンサート**

日時　3月20日（日）
会場　ホテルゴーフルリッツ16Fパルセロナホール
。2時の部（開場1時30分）
(1)歌で聞く伊丹三樹彦「花仙人」世界をめぐる旅
(2)山頭火と放哉をめぐる旅
。6時の部（開場5時30分）
(1)山頭火と放哉の世界
　お話し　伊丹三樹彦
(2)山頭火と放哉を歌う
料金　各部三、〇〇〇円
　（全自由席）
☎303－5555

**●ゴーフルアルデア北野**

**3周年記念展**

西村元三朗　半世紀の航跡
53、57年、新創作展にて受賞
80年　神戸市文化賞受賞
日時　3月9日（水）～
　3月21日（祝・月）
　期間中無休
　10時～18時
　（最終日16時まで）
会場　ゴーフルアルデア北野
　4階アート・ギャラリー
☎333－5555



砂時計　1953年

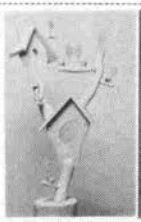
**●丸善よりおしらせ**

**・ブーランジェ版画&杉本留治彫刻展**

3月10日(木)～15日(火)

ポリビア共和国生まれのブーランジェは、世界的な版画彫り師ジョニイ・フリードランデルに選抜し、パリのフリードランデル工房でエッチングを会得。

一九七九年には「ユニセフ国際児童年」の公式アーティストにも選出された作家である。



**・一備前焼―横山伸一作陶展**

備前焼の新進作家、横山伸一氏の作陶展。

3月17日(木)～22日(火)

どちらも丸善・神戸元町店2Fギャラリーにて

## PRESENT CORNER

**●アサヒビールから「生ビールZ」をプレゼント**

右頁でご紹介した「アサヒ生ビールZ」（350ml 缶、24本入）を1名様にプレゼントします。

思いっきり爽快な新しい味をお楽しみ下さい。

♥応募方法●葉書に住所、氏名、電話番号、希望する商品名を明記の上、神戸市中央区東町113－1大神ビル9F「月刊神戸っ子」神戸百店会プレゼント係までご応募下さい。3月末日消印まで有効です。当選者には神戸っ子から当選葉書を発送、葉書を持って神戸っ子まで、プレゼントを受け取りにお越し下さい。

# ポケット ジャーナル

## ★「竹中郁と神戸モダニズム」が開催

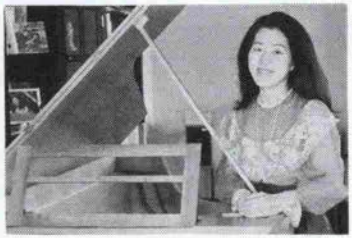
神戸市役所・市民ギャラリーでは3月10日より「竹中郁と神戸モダニズム展」が開かれている。この催しは、こうべ芸文20周年記念事業「竹中郁と神戸モダニズム」の一環として行われているもので、元こうべ芸文常任委員で、神戸を代表する詩人である故竹中郁氏に関する詩集、原稿、自画像等の遺品が展示されている。来月には竹中氏が後半生を捧げた「こどもの詩」の活動を展示する「竹中郁とこどもの詩展」や記念講演会も予定されており、これら一連の催しを通して、戦前から戦後にかけて活躍した故竹中郁氏の足跡と業績が紹介される。

◇「竹中郁と神戸モダニズム展」
○日時 4月11日(月)まで
○会場 神戸市役所1号館2階市民ギャラリー
◇「竹中郁とこどもの詩展」
○日時 4月13日～5月8日
○会場 神戸市役所1号館2階市民ギャラリー
◇「詩と愛 竹中郁展」記念講演会
○日時 4月2日(土)午後2時～
○会場 せいでんラピングホール
■お問い合わせ 神戸市役所市民局文化振興課☎078－331－8181代

## ★第18回灘ライオンズクラブ音楽賞授賞者決定

関西におけるその年度の最優秀新人に奨学の目的で送られる「神戸灘ライオンズクラブ音楽賞」の18回目の授賞者にフォルテピアノの奥千恵子さんに決まり、2月25日オリエンタルホテルで授賞式が行われた。

奥千恵子さんは現在日本テレマン協会のフォルテピアノソリスト。'90年よりフォルテピアノに取り組み、コレギウム・ムジクム・テレマンとの協演、モーツァルト、ベートーヴェンのプログラムでのリサイタルの開催等幅広い活動を続けてきた。この間に「咲くやこの花賞」「大阪文化祭本賞」他を受賞、今回は昨年12月に行われたリサイタルの成果を認められての受賞となる。「私を支えてくださる皆さんに感謝したい。この賞を励みにこれからも一人でも多くの方にフォルテピアノの音色を楽しんでもらえるよう頑張りたい」と喜びを語る奥さん。今後の活躍が益々期待される。



奥 千恵子さん

## ★ラジオ関西が4月に音響技術者養成講座を開講

関西ラジオ事業社では、音響技術者を専門的に養成する講座「ラジオ関西アカデミーPA・レコーディングエンジニア養成学部」を4月に開講することになり受講者を募集している。

## ★誕生日ありがとう運動

### 私の出会った宝子たち(14)―私の夢は、お嫁さん―

Y子さん

他市から電車に乗って通っているY子さんは、弱視の為に盲学校を卒業し、マッサージ師の資格も取り、しばらくはマッサージの仕事をしていたが、長続きせず学園にくる様になった。

買物もひとりででき、簡単な英語も読めるし、どくどく普通の女性である。

彼女の夢は結婚すること。

「でもご飯炊かれへんし、やっぱりあかんわ」と、いつもあきらめてしまいます。

グループホームなどで、それなりの指導を受けて、生活できる様になれば、彼女の夢も実現可能だと思うのですが。家ではどうしても、甘えて何もしないし、また、何もさせてもらえないようです。

テレビ大好き人間で、特に「キャンデイ・キャンデイ」などの女の子のアニメ党です。

お箸も、箸箱もキャンデイ・キャンデイです。

そんなかわいい彼女の唯一の欠点は、根気がないことです。

その為に仕事の能力はあっても、就職が難しいのです。

Y子さん。根気力を養って早く「かわいいお嫁さん」を実現させて下さいね。もう、若くはないのですから。

(N)

**誕生日ありがとう運動本部**
〒651 神戸市中央区御幸通八―一―六
神戸国際会館一階郵便局の隣
TEL・FAX
○七八―二二一―二一一四

特色は放送局の講座ならではの実践的な実習プログラム。契約スタジオをはじめラジオ関西ホールなどで行われるため、コンピュータミックスダウンなど最新の設備が使用でき、またコンサートのPA実習も可能だ。

神戸では数少ない音響技術者養成の講座だけに、この機会を逃さず今すぐ御応募下さい。

◇養成期間　2年間（1年目は講義と実習、2年目は実習が中心）
◇募集人数　昼間部30人夜間部20人
■お申し込み・お問い合わせ　ラジオ関西事業社内「ラジオ関西アカデミー事務局」☎078－731－2251

**★日本人の食文化をユニークに語る**

人間の生きざまとその諸相を文化として捉え、生活文化に関わる様々な活動をしている社団法人・生活文化研究所が「食文化と日本人――グルメ時代のたのしみ――」を出版した。

同研究所は15年前に関西で発足したライフスタイルを研究するシンクタンク。「食・衣・住・遊・身・心・営」の7つのジャンルを対象に文化サロンとして研究例会を毎月開催、その成果が「Jの時代」「衣類人類学」「遊びと日本人」に続く四冊目となる同書に結実した。

今回は、日本の食の伝統・歴史・文化を中心に、店のオーナーの食談義、駅弁の話、調理器具開発の裏話等幅広い内容が収録、ユニークで興味深い食文化論が展開されている。楽しくおいしい食生活のお伴に最適の一冊。一度御賞味下さい。

啓文社刊。二千四百円。

**★「安岡正篤先生に学ぶ」出版記念講演会開催**

ポートピアホテルで、約五年、三十一回にわたり行われてきた「安岡正篤先生に学ぶ」朝食会での講話が収録集として出版されることになり、民間政治臨調会長などで活躍中の亀井正夫氏を迎え、出版記念講演会・懇親会が開催される。

故安岡正篤氏は、吉田茂以下、歴代の首相の師といわれた漢学者。戦後、全国師友会を設立、政・官・財各界の指導者の教化に努めてきた。朝食会では、その安岡氏に教えを受けた現在各界の第一線で活躍している方々が講師を務め、延べ三千人の出席者が安岡人間学を通し、混迷する世を生き抜く知恵を学んできた。

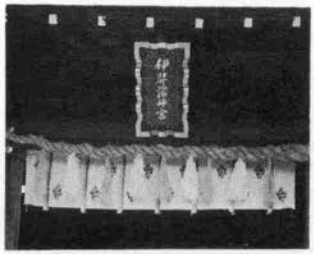
故安岡正篤氏

今回出版されるのは、そこでの講話を収録したもので、講演会・懇親会の参加者には一冊贈呈される。

◇日時　3月29日（火）講演会18時～19時　懇親会19時～20時30分
◇場所　ポートピアホテル南館一階「大輪田の間」
◇会費　一〇、〇〇〇円
◇テーマ　「安岡教学と平成の改革」
◇講師　亀井正夫氏
■問い合わせ・申込先　ポートピアホテル　サロン・ド・ポートピア係
〒650　神戸市中央区港島中町6－10－1　☎078－302－1111（受付10時～17時　申込みは3月28日（月）まで）尚、「安岡正篤先生に学ぶ」（致知出版社・2800円）は3月29日発売予定。

**★淡路島の魅力を是非あなたにも知ってもらいたい**

温暖で自然に恵まれた瀬戸内海最大の島「淡路島」。大都市圏からも気軽に行けるリゾートアイランドだが全国はもとより関西でもこの島の良さが意外と知られていない。そんな中、地元でペンションを営む五人のオーナーが「P・O・P事務局（ペンション・オーナーズ・プレゼンツ）」を結成、一人でも多くの人達に淡路島のよさを知ってもらい足を運んでもらおうと、地道な活動を続けている。


淡路島は神話伝承の地でもある

五人のオーナーの皆さんはいずれも島外出身者。そのことがかえって地元の人が見過ごしている島のよさやスポットを知ることになったという。「今後はそういった利点を生かしながら、現地の新鮮で正確な情報を提供するなどして島外の公共機関やマスコミにも積極的に働きかけたい」と

〝島おこし〟への思いを熱っぽく語る。将来的には、ネイチャー・パーティの開催や通信紙の発行などの活動にもつなげていきたい考えだ。

素敵なペンションのオーナーに出会えるのもこの島の魅力の一つ。あなたも一度淡路島に訪れてみませんか。

■お問い合わせ P・O・P事務局 〒656―21 兵庫県津名郡津名町木曽下1267 ☎0799―62―2623

★異色キャストと新進アーティストがジョイント

劇団神戸では、アトリエ第一回公演「3っつの毒」をかんしんホールで上演する。劇場空間を「アートとドラマの出会いの場」として始められる新しい試み。最初の公演となる今回は、染色造形作家の岡みち子氏を美術に迎え、ひと味違った美意識を持つ新しい展開を模索していく。

キャストには劇団神戸のメンバーに加え、板東玉三郎との共演経験もある東村晃幸、元宝塚歌劇団の水谷みきも参加。アートフルな空間のなか、極上の三つのミステリー・ドラマが繰り広げられる。

どうぞお見逃しなく。

◇日時 3月19日(土)18時半 20日(日)14時

◇会場 かんしんホール(関西信用金庫ビル8F)

◇料金 一般二千円 学生千五百円 ペア券三千五百円

■お問い合わせ 劇団神戸 078―392―1664

熱のこもった練習風景

## 花時計

### 「神戸を創る」を読む

「宮崎辰雄」前市長の著作「神戸を創る」―港都五十年の都市経営―が上梓された。神戸の都市経営、街づくりのすべてとして、〝最小の市民負担で最大の市民福祉〟というスローガンを掲げて街づくりに取組んだ。その経歴も赫々たるものだ。

何しろ純粋の〝神戸っ子市長〟である。兵庫幼稚園、橘小学校、神戸三中(現長田高)というから、神戸漬けである。同窓では、「暮しの手帖」の故花森安治。淀川長治、彫刻の柳原義達、太陽神戸銀行の頭取の石野信一さん。ダイエーの中内切さん、ジャーナリストの大森実さん等多彩な同窓の顔ぶれを持つ。

昭和十七年、神戸市に勤務、昭和二十年戦後の戦災復興の直接担当者となる。昭和二十八年から昭和四十四年九月まで助役として縦横の活躍。同年十一月神戸市長に当選昭和六十四年十一月神戸市長退任まで二十年間に亘って神戸市長を勤めた。「美しい街・神戸」づくりに専念、街づくりに強烈なイメージを与え都市経営に敏腕を振った。

「激変緩和」「不言実行」「労働は善」「先見性」「フェイルセーフ(用心深く)」が宮崎哲学の五本柱だという。

〈Y〉

## ●KOBE POST

★株式会社朝日ビルディング(代表取締役社長・鈴木敏男)と、株式会社朝日新聞社(専務取締役大阪本社代表浜田隆)では、中央区浪花町に「神戸朝日ビルディング」(神戸支社☎078―331―6361)と、「朝日新聞神戸支局」(☎078―331―4144)が、3月15日に完成。披露パーティが、神戸朝日ビルディング「クォーター59」で開催されます。

★3月7日午前11時～11時30分にポートアイランド南公園において「平和の珠・天津」(神戸天津友好都市提携20周年記念)のモニュメントの石が天津から到着、披露式典が平和のモニュメントをつくる市民の会(会長・笹山幸俊市長)で催される。☎(078)303―1567

★能福寺雲井世雄さんの長女律子さんと、松田静雄さんの長男雄善さんが、2月5日(土)ホテルオークラ神戸で曼殊院山口圓道ご夫妻のご媒妁により結婚式を挙げられました。おめでとうございます。

★テノールの羅清水さんの次男正裕さんと、山下勝也さんの長女歓南さんが、2月27日(日)六甲荘で小笠原暁ご夫妻ご媒妁により結婚式を挙げられました。おめでとう!

★邦舞家永井登志春師の追悼の舞踊公演が、門下生の永井千代春さんが、3月5日午後2時より明石市民会館中ホールで〝永井流翔春会〟として開催。お問合せ☎078(936)4302

★3月12日(土)正午より神戸山手女子短大二号館において、奥村彪生ゼミの学生達が、奈良、室町、安土桃山、江戸、明治、大正期の外来料理のロウ細工を披露し、鹿鳴館における仮装舞踏会のご馳走を再現。

★三洋化工㈱(代表取締役田中正郎)が創立30周年を迎え、記念祝賀会を、3月25日午後3時より生田神社会館で開催。厚生大臣賞を受賞されたお慶びもかねて行われる。

# びっと・いん

## ★重要文化財の建物で格別の広東料理をどうぞ

重要文化財・旧神戸居留地十五番館で営業しているチャイニーズ・レストラン〝15番館〟がこの4月にオープンして一周年を迎える。「本来中華料理はフランクに、ラフに食べるもの」とおっしゃるオーナーの井原さん。気軽に来て楽しんでもらうことをモットーにしているが、開店当初は構えて来店するお客も多かったという。

気軽にこの扉を開けて下さい

新鮮な季節の材料にこだわったメニューはランチもディナーも充実。季節毎にメニューを変えるディナーコース、ニーズや予算に応じての特別メニュー、70品目にも及ぶ単品やお得な日替りランチ（九百円）と、味もサービスも一流だが気どりがないのが嬉しい。歴史ある建物を最大限に生かしたシンプルでゆったりした空間での食事は、神戸ならではの気分が味わえる。

■神戸市中央区浪花町15番地 ☎078－391－1555 11時半～14時 17時～（ラストオーダー21時） 土曜休 尚、4月8日～15日は一周年記念として特別メニューが用意されている（要予約）。

## ★気軽に行ける粋なお店「やしき」

肩肘張らずくつろいだ気分で楽しい夜を過ごしたいあなたにピッタリなお店が東門街横三角マーケットにある家庭料理の〝やしき〟。ラジオ番組に投書したのが縁であのやしきたかじんさんが命名してくれた。

新鮮な材料が持ち味で、小鉢物、お刺身、串カツなどいずれも期待に違わないおいしさ。かきのみそ煮は特にお薦めだ。お酒なら薩摩焼酎「神の河」が水割り、湯割り、ロックとお好みに応じて楽しめる。

御主人の竹内さん

「誰にでも気軽に来れるお店に」と御主人の竹内さん。三千円もあればお腹一杯のお値段、行き届いたサービス、気さくな御主人と、一人でも、カップルでも、女性同志でも気兼ねなく入れる粋なお店だ。

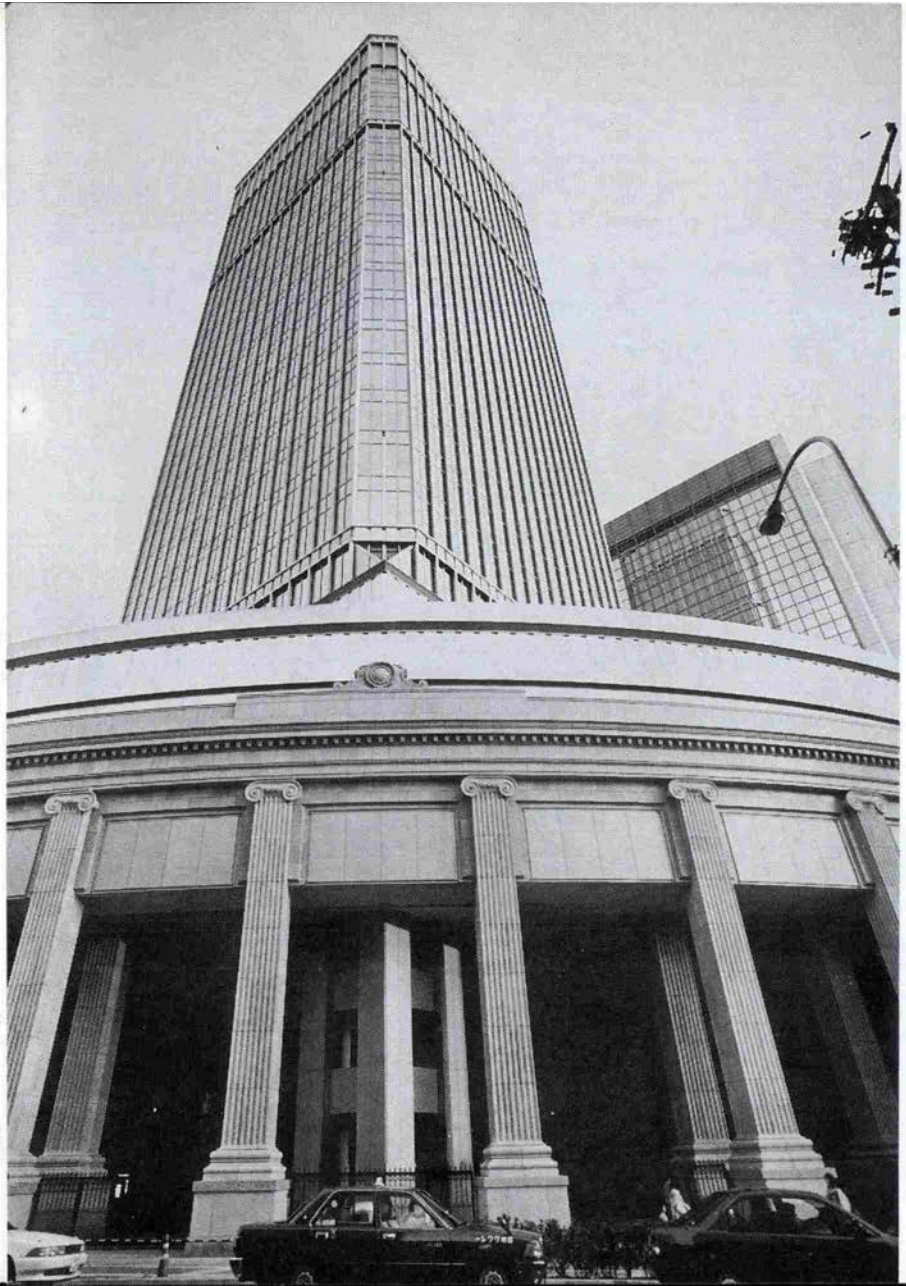
■神戸市中央区中山手通1－14－8 ☎078－331－7453 16時半～24時 第1・3・5日曜休

## ★味・ボリューム・値段と三拍手そろったお好み焼

鯉川筋と山手幹線の交差点を少し北、古い家屋が立ち並ぶ通りにお好み焼・鉄板焼の〝一平〟がある。ご主人〝一平ちゃん〟の自慢は、檜造りのカウンター。白い木肌には鉄板焼屋独特のべたつきが全く感じられない。「まずぶた玉を食べてみて下さい」と奥さん。他はやむをえず値上げをしてきたが、ぶた玉（500円）の値段だけは守ってきているそうだ。ここのお好み焼は焼く前のタネを見ただけでまず、山芋の量の多さにびっくり！その上に隙間なく並べられる具のボリュームに二度びっくり！魚介類山盛りのスペシャルちゃんぽんは1200円。そしてその日のおすすめも要チェック。鉄板でどうやって？と思う湯豆腐や蠟の酒煮が一平ちゃん考案の箱型に折ったアルミホイル鍋で目の前に現れる。お昼はもだん焼（650円）、オムそば（700円）が人気。

おしどり夫婦がつくる、あつあつお好み焼

■神戸市中央区中山手通4－11－17 ☎078－232－1161 11時半～15時 17時半～23時 月曜休



●るぽ・えっせい神戸●⑱

# 不死鳥の如く 神戸朝日ビルディング いま新たなる飛翔

三条 杜夫〈放送作家 フリーアナウンサー〉 写真／米田 英男

上が旧、下が新朝日ビル
シンボルマークは残った

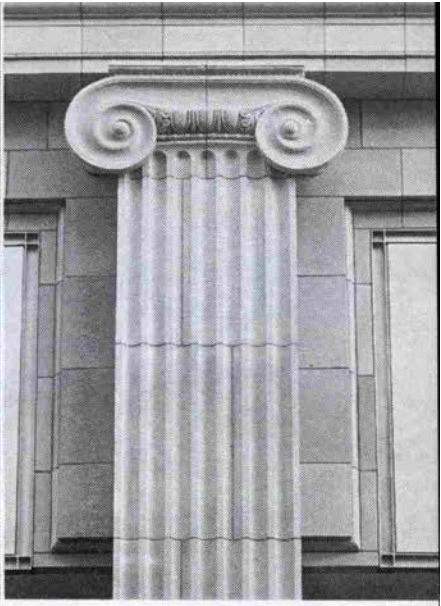
昔の朝日会館には思い出を持つ人も多い

中学校の夏休み工作展に出品した風車の模型を見に行ったところが「朝日会館」だった。3階か4階かの会場までエレベーターで上ったが、30年近く前にはエレベーターガールがいて、イガグリ頭の僕たちを親切に案内してくれた。大学を出てマスコミの世界に入った時、朝日新聞の記者からインタビューを受けた。「若者の取材は若者ので」との見出しの記事で僕が主宰していた「ル手ポライター集団・3DIG」を紹介してもらったが、活動のもようをあれこれ聞いてもらったところが1階の「喫茶・サンパウロ」だった。ちょうど20年前、朝日新聞が駈け出しの若者を認めてくれたからこそ今日の僕がある。いわば「サンパウロ」はフリーランサーとしての僕の振り出し点ともいえる記念の店として、いつまでも思い出に残ることとなった。あの時、僕は若者だった。

## いぶし銀のような光を放った生きものも寄る年波には勝てなかった

神戸っ子なら誰れしも一つや二つ、懐しい思い出を持っているはずの「朝日会館」――。それは単なるビルというよりも、生きものだった。證券取引所として昭和9年に誕生して戦後は進駐軍の野戦病院となり、その後はロードショーの映画館として親しまれた。「ロミオとジュリエット」など、まるで昨日のことのように僕の頭の中にスクリーンがよみがえる。

地階の「朝日小路」も忘れられない。作家の陳舜臣さんがよく飲みに通ったという小料理屋「あき穂」。スタンドバーの原点をほうふつさせた「神



席数505席とこの規模のホールの誕生はうれしい

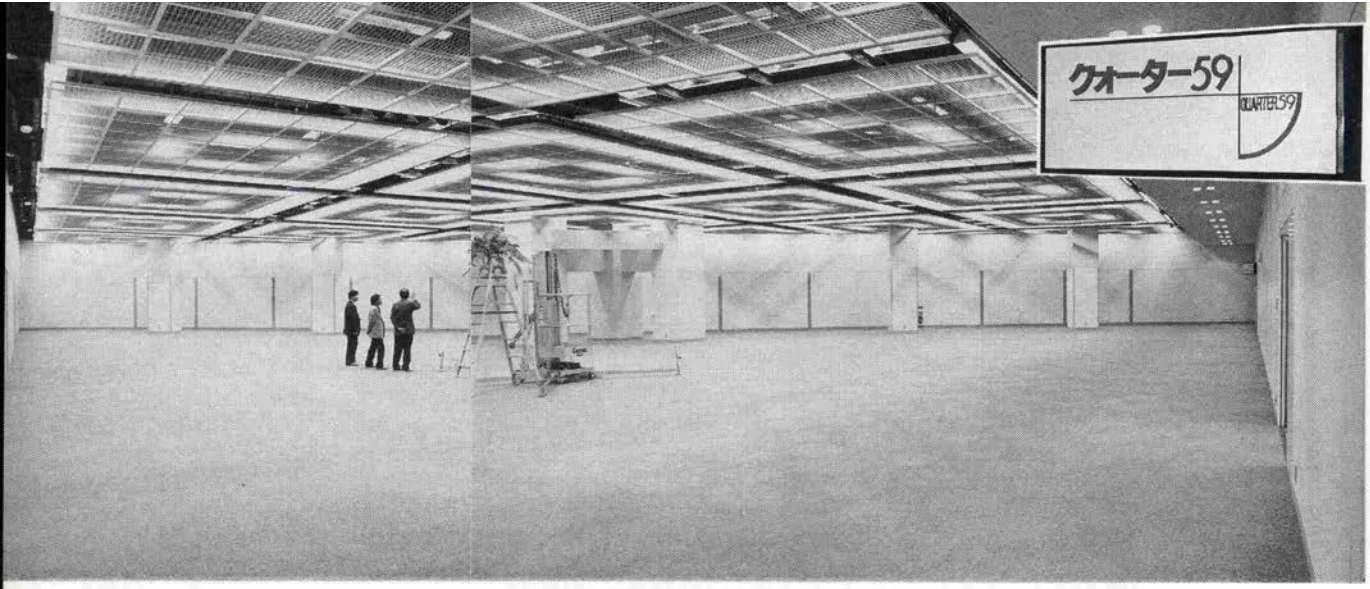
戸ハイボール」など、ハイカラコウべらしい店がいぶし銀のような光を放っていた。

西洋文明導入のきっかけとなった旧居留地の北隈にデンと控えたイオニア式片蓋柱8本。独特の円弧を描いたスマートな建物がいかにも神戸らしい趣きをたたえて、静かに、しかし、威厳を持って、三宮の中心地に息づいていたのである。ルネッサンス風の名建築と讃えられたそれも、生きものであれば、寄る年波には勝てなかった。近年では昭和57年12月封切のスピルバーグ監督のあの「ET」が半年間のロングランを演じてかっさいをあびた建物が平成2年3月29日から31日まで行われた「さよなら映画会」を最後に、この世から姿を消すこととなった。市民の多くが心の中で涙した。「ああ、思い出が消える…」みんな同じ想いであったろう。僕もまた、青春の時間をぶっち切られるようで、いたたまれない気持だった。

ところがどっこい、「朝日会館」は不死鳥の如く、よみがえることとなったのである。それも、昔の面影を残しながら、新しい平成の香りを添えて。

## 新しい神戸文化の拠点と市民の心のよりどころ

平成3年解体。平成4年着工。新しい「神戸朝日ビル」誕生のための作業が始まった。旧ビルの姿をとどめる低層部分（地下2階〜地上6階）と、高層部分（7階〜26階）をみごと融合させたモダンなビルは、低層部の曲線美と高層部の機能美がミックスしたユニークなビル。「長い間、神戸




ファッションショーやパーティなど企画しだいでいろいろと利用できるスペースだ

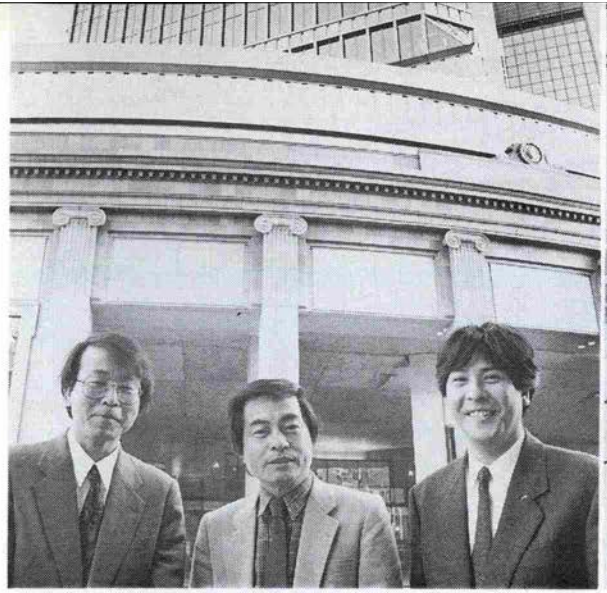
市民に親しまれてきた建物ですから、旧ビルのイメージを新しい建物の一部に取り込む〝イメージ保存〟の方法を採用したんですよ」と、㈱朝日ビルディング神戸支社の井上肇さん。

案内されて完成間近のビルを見た。独特の扇形をしたあの建物が、確かにそこにあった。「良かった」ほっとした思いで胸を撫でおろす。が、これまでの様相とちょっと異なっている点に気付く。映画館の入口と壁面を構成していた壁が取り払われ、門柱の奥に自由な公開空地ができている。石とGRC（ガラスで強化されたコンクリートパネル）、それにテラコッタ（焼きもの）をたくみに使った風格ある建物は、なるほど昔のあの面影をうまく残しており、ノスタルジアさえ感じさせてくれる。

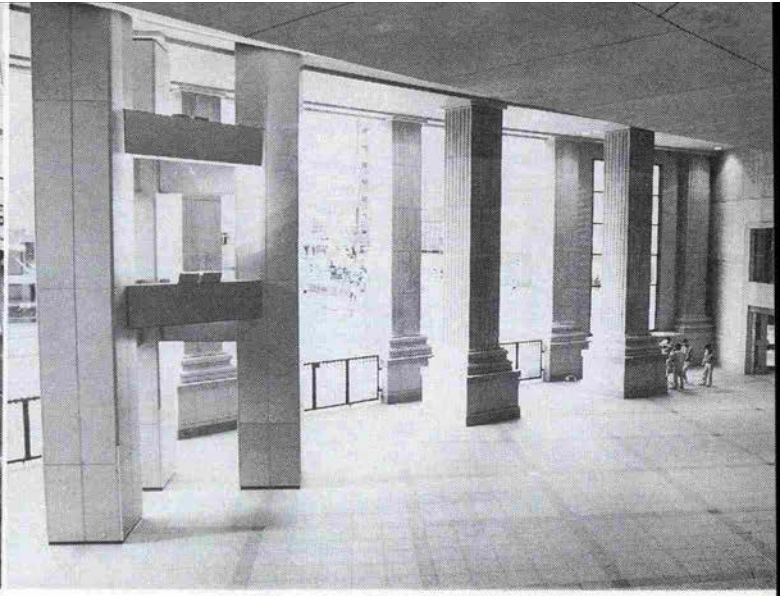
新しいビルの何よりもの特色はビル全体を劇場と見立て、「天」「地」「人」の三つの空間を形成していること。「天の劇場」は4〜6階の「神戸朝日ホール」。505席のこじんまりしたホールはクラシック、ミュージカル、映画、演劇に利用され「聴きやすく、見やすい」のが自慢。これに対し「地の劇場」があり、地下2階に設けられた「クォーター59」が開放感あふれるイベントホールとして、各種催しに利用される。「それこそ、市民のコミュニケーションの場として役立ててほしい」と、支配人の川村衛さん。

「人の劇場」は、1階の公開空地・ピロティ。約790㎡を開放して、多くの人々が出会い、文化を楽しむ新しい拠点として活用してもらおうという心くばり。

さて、旧ビルの名物だった食堂街は2階のレス



左から伊藤さん、筆者、川村さん



例えば人前結婚式をしてみたりと、自由に遊べる空間だ

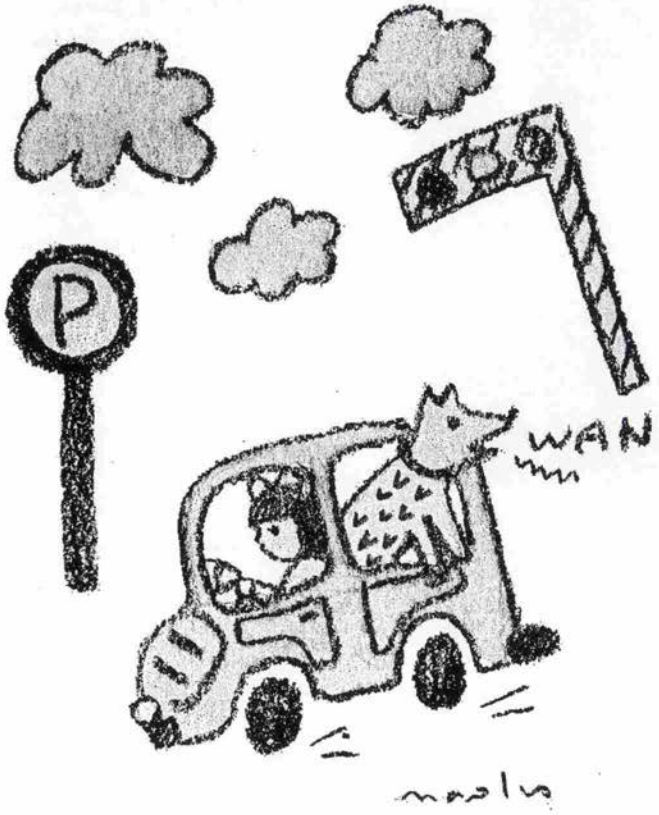
トラン街によみがえっている。喫茶、鉄板焼、和食、寿司、麺類などの店が味を競い合う。

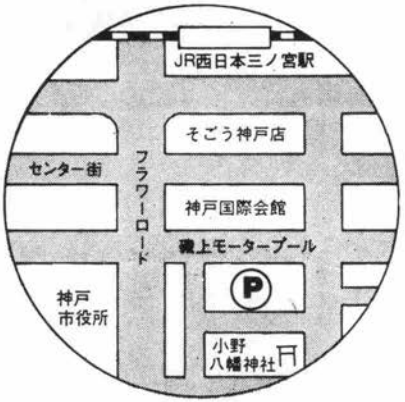
高層部は7～25階がオフィス。各階のオフィスには柱がなく、広々とした感じを与えるが、ワンフロアのコンクリートのたわみをジャッキアップによる調節するという〝床たわみコントロール法〟により工事を行ったという苦心の作。ゆったりした窓からの神戸のパノラマが素晴らしい。

新ビルの竣工はこの3月。ざっと30カ月余りの工期だが、これだけの大きなビルがなぜ、そんなに短い工期で完成したのか？　その訳を㈱竹中工務店大阪本店の担当者が説明する。「鉄骨が建ち上がるたび、最上部にデッキプレートを敷き、それを屋根として利用、そして通常、工事の最後に取り付ける屋上階の外装パネルを先に組み立て〝壁〟として利用しながら上昇させて風雨を防ぐという〝全天候型〟施工法を採用したからです」

かくして、新しい命を得た神戸朝日ビル、3月31日の前夜祭に続いて4月はオープニングイベントが目白押し。ピアノリサイタル、ヴァイオリンリサイタル、オーケストラ演奏会のほか、エンターティナー、ブラザーズ・フォアもやってくる。神戸っ子の心のよりどころとして、人々にかけがえのない思い出をたくさんプレゼントしてほしい。

ビジネスに!
ショッピングに!
ご利用ください



# 磯上モータープール

(神戸国際会館前) TEL (078) 251-2662 (8：00A.M.～11：00P.M.)

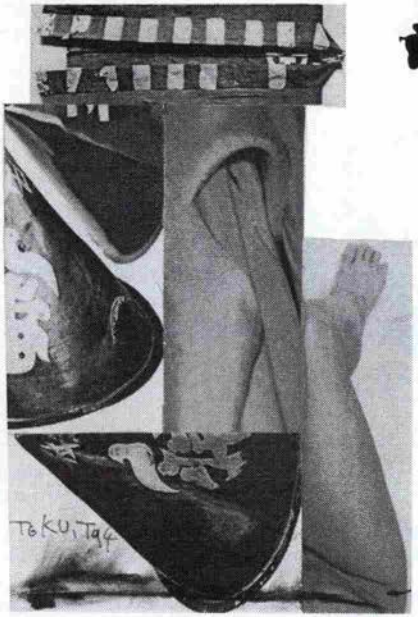
- 収容台数 350台
- 月極駐車可
- 年中無休

連載小説〈第3回〉　第18回神戸文学賞受賞

# 駆け落ち

――慶長五年九月十五日――

楽　ミュウ
コラージュ／田中　徳喜




為助とは堂の前で別れた。

日は傾きかけていたが、道には昼の暖かさが残っている。山に沿ったその道は、さなえの気持ちが安らぐ場所だった。

次に通るときのために、まだ熟していないヤマブドウのありかを覚えこんだり、アザミに目を止めたりした。

（兄さん）

心の中で辰吉に声をかけた。

辰吉の、気の弱そうな、優しい眼差しを思い浮かべた。

その顔に、だいたい兄さんが生きてたら、為助と深い仲になることはなかったんやと、心のなかで、ごねた。

河内国から引っ越してきて半年後、市右衛門が辰吉を訪ねて家へきた。市右衛門は座り込んで、辰吉と長いこと、熱心に鉄砲について話していた。喉が渇くだろうと、さなえは白湯をだした。

話の邪魔をしないよう、そっとだしたつもりだったが、市右衛門は途端に、口をつぐんだ。

「さなえでございます」

辰吉が詫びるように言った。さなえは市右衛門と目を合わすまいと、深くお辞儀をしていた。

物足りなげな顔をして、市右衛門は黙っていた。

「妹で、十八になります」

辰吉がつけくわえた。

市右衛門は白湯が入った茶碗をゆっくり持ち上げ、口

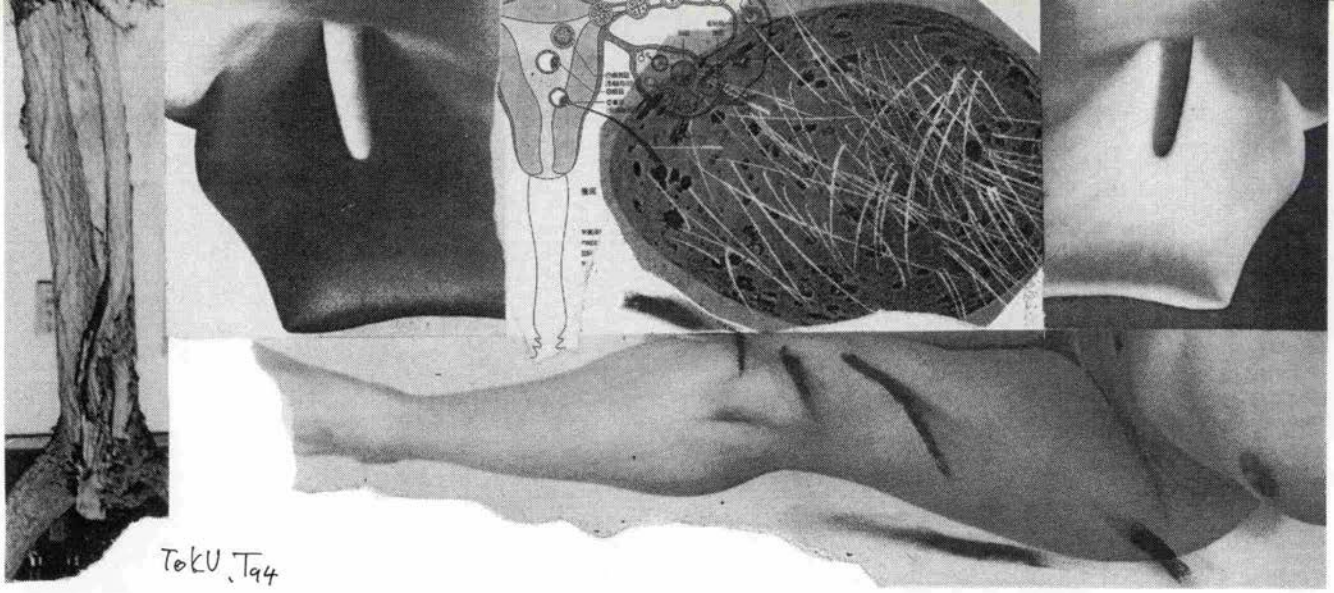
さなえは瓶を抱いて、袂をぶらぶらさせながら、父の妹、叔母のおまつの家へ向かっていた。

袂には歩きながらとった、まだ青いアケビと、ムカゴを入れていた。下女のはなが喜ぶはずだった。為助と会っていたぶんだけ、帰りが遅くなる。アケビとムカゴで、はなをごまかそうと思っていた。はなは、まだ子供だった。

にふくんだ。
「うまい」
そうひとこと言うと、また鉄砲の話を始めた。
さなえはほっとして、ふたりのそばを離れた。白湯に、うまい、まずいなどあるものかと思ったが、うまいと言われれば悪い気はしなかった。自分に対する好意を感じた。
だが、まさか、その市右衛門から嫁にきてほしいといわれるとは、思っていなかった。人を介して、正式に申し出を受けた時、自分より、兄の鉄砲鍛冶としての腕を、市右衛門は欲しがっているのだと、考えずにはいられなかった。
さなえは迷った。
夫婦になる約束をしている男が、いたわけではない。
縁談は、それまでにも幾つかあったが、まとまりかけると、きまってさなえは結婚する気をなくした。相手に望まれれば、望まれるほどいやになった。初めての男に裏切られてからは、夫婦になるなど、到底望めない相手とばかり、その場限りの恋をしてきた。
岩手村にきてからは、まだそういう相手はいなかったが、とうに二十歳を過ぎた辰吉が独り身なのは、自分が嫁にいかないからだと知っていた。辰吉のために、早く家をでなければと思っていた。
為助が、自分を好きらしいということは、かなり前からわかっていた。
辰吉も為助の気持ちに気づいていて、市右衛門のところへいくように、さなえにすすめた。為助とじゃ、いい暮らしは望めないからと、辰吉は申し訳なさそうに、ぽそりと言った。
さなえは妻になろうと決めた。
もともと、さなえの方から断れるはなしでもなかった。
その頃は、為助を弟のように思っていた。さなえと為助のあいだには、つねに辰吉がいた。辰吉が他界すると、為助は辰吉を失った悲しみの涙と一緒に、自分の思いをさなえに吐き出した。
為助は、橋田家に嫁いださなえを慕い続けていた。思いを打ち明けて、為助は一人で河内国に帰ろうと思っていた。だが、さなえは兄を失った悲しみと、市右衛門に対する不満を紛らすために、為助を受け入れた。
夫がいながら、さなえは為助と隠れて会うようになった。

山に沿った道を離れると、さなえは急ぎ足で歩いた。息を弾ませながら、おまつの家にたどり着いた。
「武家の暮らしは、どうや」
土間に立って、おまつが聞いた。
さなえは傍らから、瓶に酒を注ぐはちきれそうに太った指を見ていた。その指と同じように、おまつは太っている。
竈には火がはいっていて、夕餉のかゆの鍋がかかっていた。
亭主は、酒好きで、おまつは酒をきらしたことがなかった。為助と同じ鉄砲鍛冶の職人だが、鉄砲の使い手でもあり、戦に駆り出されていた。
「どうって？」
「馴染んだか？」
さなえはとぼけたような顔をした。
橋田家に嫁いでからこの二年、おまつはさなえの顔を見る度、今までとは違う生活に、馴れたかどうかを尋ねる。必ず聞く。その度にさなえは同じことをこたえる。
「職人の血ひいてるんやもん。武家の女になんか、なろうおもても、なられへん。それに武家ゆうても、足軽やから」
おまつは嬉しそうにほほ笑んでから、すぐに厳しい顔をして諫めた。
「うちら、河内国から来たもんは、この村ではよそもんや。よそもんで、そのうえ鍛冶やの娘のあんたを、嫁にもろうてくれはるやなんて、ふつうやないで。ありがた

いとおもうて、しっかり尽くしてや」
「わかってる」
おまつの方を向かず、さなえはうわべだけの返事をした。
（旦那さまはただ、いい鉄砲がたくさん欲しくて、鉄砲鍛冶の職人とつながりをもちたくて、うちを後妻にしたんちゃうやろか）
そう言いたいのを我慢した。
言葉をのみこんでいるさなえの様子を、おまつは察した。
「橋田様が家をあけられて、何日になる？」
「もう五日以上」
さなえは短くこたえた。
八月下旬、岐阜城が落ちた後、市右衛門は夜になると屋敷に帰ってきていたが、月がかわってしばらくするとまた出ていった。それからちょうど六日目だと、さなえはわかっていたが、そうは言わなかった。面倒だった。
おまつは瓶に栓をした。
「いつも、さなえちゃんのことが気にかかってる。あんたのおかあちゃんが息をひきとる前に、この手をぎゅっと握ったんや。死んでゆく人とは思えんほど、強くな。あの感じがまだ残ってる。この手が忘れへんのや」
さなえは小さかったが、その時のおまつを覚えている。おまつは母の目を見ながら、何度も頷いていた。
父はすでに、この世にいなかった。
「さなえちゃん、しっかりしてや。おかあちゃんにあんたのこと、頼まれたんや。人並みに、間違いなく暮らしてや。なんかあったら、うちの責任や」
「おばちゃん。うちもう大人やで」
「いや。あんたは気がつよすぎて、ときどき突拍子もないことするし。とにかく、はよ、ややこを産んで。なぁ」
おまつは瓶をさなえに差し出した。
さなえはいやな気がした。おまつの小言が重たかった。女として、子を産めばそれでいいというわけはないし、産みたくなかった。だいいち、今さら、できては困る。
さなえはつくり笑いをした。そして瓶を受け取ろうと、手を伸ばしかけた。
すると、ちょうど鍋がふきだした。さなえは咄嗟に鍋の蓋をとった。湯気が勢いよくのぼって、かゆの匂いがたちこめた。その匂いがなぜか鼻についた。と、急に気分が悪くなった。
口元を押さえながら、いそいで戸を開け、外に飛び出してから、しゃがみこんだ。
おまつがきて、さなえの背中をさすった。
「さなえちゃん、あんた」
（まさか…）
「月のものがないやろ」
「うち、よく遅れるから…」
さなえは怖々、おまつの横顔を見た。おまつは大きく顔をたてに動かした。顎の肉がたぽたぽと、激しく揺れた。
「間違いない。男の子やとええな」
おまつは、唇を、裂けるかと思うほど左右に伸ばして、笑顔をつくった。
さなえの体中が火照った。
（市右衛門と、為助と、どっちの子やろ）
瓶を取りに中に戻ると、逃げるようにおまつの家を出た。
おまつは戸口の前に立って、歩いていくさなえの背中に向け、祝いの支度のことだの、体の調子が少々悪くてもあまり気にすることはないだのと、あれこれ大声でわめいた。
さなえはおまつの話を聞くふりをして、歩いては立ち止まり、また歩いては止まりと幾度か足を止めたが、心では為助にはやく伝えなければ、どうにかしなければと、焦っていた。
だが、為助の家はおまつの家の裏手で、屋敷とは反対




方向にある。前に進むたびに遠くなっていく。それに為助はまだ留守のはずだし、いつ戻るかわからない。

屋敷に帰るしかない。

これまで男と体のつながりをもっても、子はできなかった。自分は石女(うまずめ)かもしれないと思っていた。

市右衛門は子が欲しいと言ったことはないし、子のできないのを責めることもしなかったが、橋田家に跡継ぎがいらないはずはなかった。

子ができれば、市右衛門と心から、通じ合えるのかもしれなかった。だからこそ、さなえは、子など産んでやるものかと思っていた。子を仲立ちにして、市右衛門に寄り添っていくのはいやだった。

屋敷に向かって歩きながら、さなえは想像した。

日の当たる縁側で、市右衛門が赤子をあやしている。そのうち赤子が泣き出す。市右衛門がさなえを呼ぶ。さなえが赤子に乳を飲ませる。それを市右衛門が見ている…。

さなえは大きく頭を横に振った。身震いがした。

市右衛門は戦で、今日、明日にでも死ぬかもしれない。それに、赤子の顔は為助とそっくり同じかもしれないのだ。

子の父親がどちらなのか、さなえにはわからなかった。

さなえは歩きながら、腹の中に、自分とはまったく関係のない石ころのようなものがあって、とてつもない早さで膨らんでいくのを感じた。

それを、なんとかしたいという衝動にかられていた。

けれど、ただぎこちなく、少しづつ歩みを進めることしかできなかった。せめて、このままどこかへ行ってしまいたいと思いながら、なぜか体はこわばって、駆け出すことすら、できなかった。心の底で何かに脅えていた。

少しづつ、さなえは歩いた。歩くのと同じ早さで、体の火照りはおさまってきた。おまつが見えなくなってからは、すれ違う人もなかった。昼間の仕事を終えて皆、

家の中にいる時分だった。
ひとりになると、気持ちは落ち着いてきた。そして徐々にわかってきていた。
体の中に宿ったものは石ころではなく、いつか正体を現し、目の前に姿を現す、動かしがたい、消し去ることのできないものだと。
それがたとえ、市右衛門の子であっても、為助の子であっても。
屋敷の屋根が見えてきたところで、さなえは立ち止まった。振り返ると、雲の多い夕焼けだった。
風がでてきていた。もうすぐ紅葉しはじめる山の木をうねらせ、刈り取り間近の稲を撫でながら、風が渡っていく。
時が満ちていると思った。いつか来るはずの時が、いまやってこようとしているのかもしれない。
さなえは深く息を吸い込んでから、か細く、長く吐き出した。
勝手口から、屋敷に入った。
そこにいるはずの、はながいない。
「はな」
力なく、呼んだ。
土間から二尺ほど高くなった板敷きに瓶を置いて、もう一度外にでた。屋敷のまわりを見渡した。道に出てみた。
さなえが歩いてきたのとは逆の方向から、はなが来るのが見えた。昔語りをするのが好きな老婆と一緒だった。
はなは体格がよく、男並の力がある。薪割りなど、力仕事も、屋敷のなかのことは一人でやってのける。歩くときも、女にしては歩幅が広く、速足だが、老婆にあわせて歩いていた。腰の曲がった老婆と、子供のはなの背丈はちょうど同じだった。
老婆が話をしていて、それをはなが聞いているように見えた。話すのに夢中、聞くのに夢中でさなえがいるのに、二人は気づいていない。
さなえはむっとした。夕餉の支度で忙しくしているに違いないと思っていたのが、当てがはずれた。口数の多い老婆と一緒だというのも、気に入らなかった。さなえはその老婆を嫌っていた。
「はな」
怒りをふくんだ声が出た。
はなと老婆は、さなえの顔を見た。二人は同時に口を手で覆った。慌てていた。はなが老婆を置き去りにして、走ってきた。
「お、奥さん」
そばまでくると、はなはどもりながら、さなえをじっと見た。見慣れたものを、あらためて確かめているかのように、何度か瞬きをした。低い鼻のあたりが、赤くなっていた。
さなえは、はなを叱ってやろうと思った。気がたっていた。
「いまごろ、どこ行ってたんや。あんたな…」
さなえが言い始めると、背後で銃声が聞こえた。さなえは屋敷の方に顔を向けた。
「どこって。奥さんを探して。旦那さんがお帰りで、それで…」
はなは口ごもった。
「そう」
さなえは屋敷の方を向いたまま、はなのいいわけを断ち切るように言った。そして唇の内がわを、かんだ。黙って袂から、アケビと、手のひら一杯分のムカゴを取り出して、はなの手に握らせた。
はなは叱られないとわかって、明るく言った。
「すぐにまた、お出掛けだそうで」
「そう」
さなえは歩きだしていた。
後ろからようやく追いついた老婆が、はなの手の中のムカゴを一つとって、口にいれた。